

前世最低の魔王、今世愛した女。

I am yukkuri

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主となり、力を手にいれ、彼はインフィニット・ストラトスの世界を赴く。そして、よくあるアンチ系オリ主となった……そして、いつの日か一夏に破れた……それに狂い、最低最悪の魔王になり、世界を壊そうとし、一夏と戦う。

戦い終わり、地に立つは英雄だろう。だが、力を僅かでも理解した魔王の魂は、果たして滅びたのだろうか？これは、そんなお話……

目次

| | |
|-----------|---|
| 第0話：死の果てで | 1 |
| 第1話：始まる今世 | 3 |
| 第2話：嫌な隣人 | 5 |

第0話：死の果てで

「……負ける……とはな……」

「……そうか……」

「ああ……強くなつたな……」

黒い、黒い、人の闇を詰めたような黒が包む空間。そこで、2人の男が話していた。片方は死にかけ、もう片方も肩や足から出血している。もう片方の、白い鎧を纏った男の腕を枕に、金のベルトを腰に巻いた男が話す。

「……いつからだったか……私は……いや、俺は酷く孤独を感じた……」

「……アイツが死んだから、か……」

「アイツは……俺が殺したのだろうな……俺の愛は、一方的過ぎたらしい……」

そう言い、ベルトの男はゆっくり息を吐く。それを、鎧の男は静かに見つめていた。

「……俺はもうじき死ぬ……」

「……っ……」

「……何故、そんな顔をする……？俺はアイツも、アイツらも殺した……」

「……どうやっても、こうなったのかなって……」

「お前が英雄で、俺が魔王である限り……なあ……」

「何だ……？」

「すまなかった……今さら謝っても遅いか……俺は、お前と戦殺しあってつて、お前が……少し、分かった……気がする……」

「……そうか……」

「……もし……また会えたなら……お前……は……友であつて……くれるか……？」

「……ああ……」

「そうか、なら……嬉しいよ……俺のようには、なるな……力を……振るい方を……間違えるなよ……英雄……」

「ああ、分かった……さようなら、魔王……」

「ならいい……さらばだ……英雄……」

そのまま、ベルトの男は目を閉じた。その死に顔は、酷く安らかで、なのに、死んでいると確信するものだった。鎧の男……一夏は無線機を取りだし、通信する。

「……千冬姉……」

『……一夏か……?』

「ああ……終わった……鋼牙は、殺った……ミッション、コンプリートだ……」

『……そうか、お疲れさまだ……』

「……みんなは……報われたかな……?」

『……どうだろうな、迎えば寄越す。オーバー』

その声を最後に、姉……千冬の声は聞こえなくなる。そして、一夏は、ベルトの男……鋼牙に目をやる。

「……お前も……恋に狂ったのかもな……せめて、来世に幸があることを……」

そう言い、一夏は目を閉じ、黙祷する。その脳裏に、かつての仲間たちを想いながら……

「……さようなら……俺は、間違えない……少なくとも、この力は、な……」

そう告げ、一夏は迎えのへりに乗る。一夏はどこへ行くのだろうか？政府から最悪の魔王を討った英雄に仕立てあげられるのか、それともその力を恐れられ、酷い目にあうのか？だが、確かなことは1つ。

一夏の答えを聞いた鋼牙の頬がわずかに緩んだということだ。

第1話：始まる今世

「うう……うああ……んう……？」

……ここは……？いや、いい……一夏と戦って、久しぶりに生を実感できた……それだけでも満足だ……

「うー……」

毛布、だろうか？暖かい……え？

(な、何で暖かいんだ……？いや、まず毛布があることがおかしい……)

……どうやら、私は起きて、この訳の分からない白昼夢から目覚めないといけないらしい、夢の中で起きるというのも変な話だが……まず、意を決して起きる。

(……普通の部屋か、少々物が少ないくらいだな……)

ここは部屋らしい。物が少ない。パツと見だからよく分からないが……次にベッドから降りて本格的に探索しよう。そう思い立ち、ベッドから降りようとすると、少し滞空した。普段からベッドで寝ていたから分かる。いつもの私ならベッドから降りようとすればすぐ足がつく。

(……身長が縮んでいる……？あり得ない……それが本当なら、若返っていることになるが……)

……こうなればしようがない。鏡を見る。この手に限る。

「……はあ……」

ついたため息を吐いてしまう。一夏と戦っていたときにはなかったが……あの時以来すっかり癖になったらしい……

私の愛した女。彼女がいなくなって以来、私は腐った。元々復讐に狂っていた、そこにもっと燃料が加わったら、もっと燃え上がるのは必然だった……故に、燃え尽きるのは早かった。一夏の身内を襲い、殺した。一夏は俺に襲いかかり、俺も反撃し、俺たちはもう引き返せないところに来た。俺は八つ当たりぎみに魔王となった。一夏は理性的だった、専用機持ちの義務を果たそうとした、アイツは英雄になった。そんな俺たちが殺し合うのは当然だった。

(……ついに来たか……さあ、鏡や鏡や鏡さん……私の……俺の姿を
写し出せ……!)

そうして、俺は鏡を見た……そこにいたのは……

(……冗談だろう……? 何で、何でお前に……!?)

そこに写っていたのは……ピンクの髪に、青の瞳、その顔立ちは俺
の知るものより幼い、だがそれでも分かる……

(……不知火……)

俺がIS世界にまで連れてきた、とても、とても、愛しい少女だっ
た……

「……何、で……」

訳が分からない、一夏と戦って、死んで、挙げ句の果てに不知火に
なっている? 頭が溶けそうだ……

「……家族はいないのか……?」

いたらいたでどうごまかそうか……それでも頼れる人がいるなら
心強いのだが……

「……はあ……」

誰が言ったか、「ため息を吐くと幸せが逃げる」だったか……そう言
えば、さつきから声が聞き覚えあると思ったら……そういうことか
……

「あのISは……やはりない……だが……それでもいい……」

もうあの力はこりごりだ……

『……私は……あなたが嫌いです……その力があなたを狂わせている
……!』

「……っ……」

過去の記憶が、過去の言葉が、俺に突き刺さる。

「……不知火になって……生き返って……それで私にどうしろって
……?」

ああ、ため息をはいてもどうにもならない、分かっているのに吐か
ずにはいられない……こんなときに限って窓から見える空は腹立た
しい青色だった。

第2話：嫌な隣人

あれから少し経った。今日も今日とて腹立たしいぐらい暑い……。それに、もう1つ嫌なことが出来た。お隣さんと言うやつが出来る、だから、ついさつきスイカを買ってきた……。夏にはスイカは合う……。 (……はあ……。そう言えば、そろそろ学校も始まる……。私口調を定着させねば……)

どうやら、今の私は小学生らしい、それも1年……。どうやって学力を誤魔化せと？

(それもそうだが……。お隣が誰かも気になる……)

なんというか、嫌な予感がする……。具体的に言えば殺し合った奴の子供時代に会いそうな……

『ピンポーン……。すみません』

「……。え、ああ、はい」

どうやらもう来たらしい……。どうしよう、絶対に出たくないぞ……。 「……。すう……。はあ……。よし、はい、どう……。ぞ……。」

ああ、会いたくなかった、開けなければよかった。何で、よりによつて……

おりむらちかゆ 織斑千冬が目の前にいるんだ……。うえ、そういえば、一夏……。は

……

そこまで考えて頭を抱える。まじか、そういえば、しばらくは現状整理のために外には出なかった……。冗談じゃない、篠しののたばねノ之束もいるかもしれないのか？もし、目を付けられたら……

「……。あの？」

「……。何でもありません……。えっと、西原さいはらしらぬい不知火です……。どうも……」

「織斑千冬です、ああ、これ、粗品ですが……」

「ああ、すいません……」

こうして、織斑千冬とのファーストコンタクトは終わったのだ……。一夏に会わなかっただけまだいいかもしれない……

「織斑一夏です、よろしく！」

「……oh no……（小声）」

フラグ立てるんじゃないかなかった……子供の時の一夏……ちっさい……殺し合い、本当にしたっけ……かわいい……いやそれより何で俺は織斑家に誘拐されてるんだ？

「……お、織斑さん、どういうことですか……お、ゴホン……私はただの隣人で」

「いえ、せっかくですし……ね」

訳が分からない。ついさつき織斑千冬が家に来たかと思えば「家でご飯を食べないか？（要約）」と言われ、俺はホイホイと着いていつてしまった……その結果がこれだよ……

「ん？出来たか……」

……香辛料のいい匂いがある。カレー……そういえば、最近食事はコンビニ弁当だったっけ……手料理、か……

『——、ご飯食べるよ！』

「……っう……」

……何で、今思い出すんだよ……懐かしい……またあの肉じゃがが食いたい……

その日のカレーはとても塩辛かった……気がする。